惜陰録

月瀬梅渓を訪ふの記

明治廿六年三月

三

特別
イ4
1919
139

176421

梅荘に遊ぶの記

○喜樹子浪華に客居する十数日、家衡生甚楽
在都の今日俗化しきたる、清遊の一日大いに快楽
を帰着せずんば胸懐を洗ふ能はずんば、亦同族す
る能はざるを知る、偶々友人中村徳兵衛氏月瀬
に遊び、帰来其の梅花を称す、即ち梅候なる
二三日を経るとせば、自然にして住候を失ふべし、只
謂ふ速に往けと、喜樹子遊心勃興し躊躇
する能はず、忽ち車を命して旅行の用意を
なす

38- 8938

○明治十七年三月初四日、天気よろしく曇
りがちなる気味を暖かなる朝なれは、なんとなく心
もよほしたる為方を経過なれは、大阪出十四分発
町東の浪速に乗らんと急き車を命じとる
僕も又今ゑたるもの庭前のにかれ乗るよしんた
ることは停し
○次其の時習上り了一両なれ共、其の分高く候
右待て欠伸し、ゑゑものもなかんべ、心面持
顔を見せ急しき乞手をめ枝は車中の友として
果物や新聞を購ひ、十時五十四分の汽車
を待受けて出発せり、大阪より汽車に乗る

三十一銭也但し二等車なり
○汽車に乗りてより端にしかるにポツ〳〵雨の降
り出しかるにいよ〳〵繁くかたまりかゑくなり
なれど急ぎ帰り一時ばかり引退すべからずあらぬ
汽車に三人連の客あり、この雨を冒して月
ヶ瀬へ行くよしありてものとみゆ、その
よき道づれを得たりと喜んで案内頼みぬ
○月ヶ瀬に行くには西よりするものは西の小屋
に下車するを近しとす、このよし月ヶ瀬より
二里余りもあるに、北の首道絶ゆ
しく車行すべる所なく下車せざるを得

さる所あるも宇治停車場ハ上陸駅より乗車せんにハ凡
十町乃至四町もあり直線より里程ハ二里許も迂
路まで隔る乗車の都合によろしければ宇治より
路を取るべし中ニ此桃山の茶屋を経て
○淀川にも上陸場ハ通りたれど凡そ三町の間を
要す、此間渡船所あり玉水辺の汽車停車場の所
まで小舟ニ託するを要せず、唯此駅より下車し
チヨツト歩行して至るべき者ハ一あるも、又此ハ宇治
に渡りて渡船あり停車場に乗る、此辺を名
称の字とめて淀停車場の辺も小舟を渡せざるもの
あるもの、ステーシヨンより陰京都市を通ふ、庇

の真向ニあつて、下車客を迎ふる旅舘あるに
とを得べし、停車場の近くに設けたる茶店の多
きは市ニ比して最も便利のものなれハ、必ずしも
変りも多く儲ざるものなれバ、十二時三十分奈良ニ
着せり、

○奈良よりも上郡の間ニ加茂迄、大
河原、島河原、の諸驛あり、此の間特記を要
するの地を見ず則ち笠置なるものなれど宜しく初めて
楠氏の全事梅渓を経過するや、笠置の跡
を称揚し、此路より名張ニ山伊賀ニ登るも
記憶なきを以てせしも、而して此行雨天の比

るに及ぶ臨時に便なるが、中橋氏の勧めに応ずる
能はざりしは余の甚だ遺憾とするところなり、
此の田地元弘年間天正年間足利時代の歴史を以って名
あるも、今は此の悲惨の歴史が遺蹟、遠くなるに
至りても旅客の遊覧を慰むるに足る、況んや
此の地風光絶勝なるは世人の賞するところなるに於てを
や、今や鉄路は此の山脈の中腹を穿ちて
通ぜられ巨岩怪石の跡に沿ひ、木津川に沿ひて
開通せられんとせば、風光なる車中に坐して賞
玩する事を得べく、木津川岸の勝景宛然一幅
横長の墨画ひあるなり、然り而して笠置ステー□

ンを経て加茂附近に至りて見る所あり、北側面の
夕陽川沿岸に沈まんとし、峨々たる笠置山を望み
て昔日の京人をして嘆ぜしめし快
を今に偲ばしむるものあり、笠置山腹に千載の変遷を
に歴史にあらはれし行宮遺址の四大字
を刻して記念碑とせり、其の傍に細
雨濛々として車窓より之を眺むべし
旧 所々に上り騒ぎて人力車を借る
いとめる大の綱を曳かしむることあり、他にも綱曳車
夫がなすごとく棒なる綱をつけて犬の肩ぴんと
曳かせる、一見悦哉に乾して見えしおかしいなる

なんなすべていくらの楽しとやへて見るとも、飢死也
いますと車夫ともいふなる、其るなど坂路くるる
と大き精一杯曳張る、ツル人のくるも顔くま骨
をおつてなるのを見ていふるもと難しそいが、夫の
しこんなのさぶ動輪を引、つもて其気ま車上の
ならてなると思ふのと我ん乍ら、売気化する心持
気せられて疲る気ないのする、夫ゝし人のくま引の
すらるゝと此方の文明開の当るも方するなれん、可羨
少人を仂さるゝ家を続子て発足して苦しでなるが、
此地の流殷なりと歎さるゝ流家のあるのもなれん
いふ

○上野停車場より上野町迄凡二十五町、なかなかの木
與、大野木、白樫、石打、尾山を経て月瀬に至
す、その間里程凡三里十四五町、往来甚だ険路狭
く、橋なく、行旅頗る不便を感せしめたるに
今般橋梁改築せられて車馬の往来自在となれ
り、尤し伊賀大和境迄竣成しなれは遠からす成功
急の便を得るなれんといふ
○帰路のことゝて尾山を経て而後月瀬に至る
されども言ふ尾山も石打も月瀬村の小字なりし
は月瀬村とて月瀬、尾山、石打、嵩、桃香野、長引
の六ヶ村を総称するなり　其戸数五百十、人口二千四

多からむと思ふ其の地形左の如し 之れ東との比を見て伊

賀の流下する

しま芳野銭に

の時代最後に

奇しく大和の銭

地とすべし

山高き月伊

禁ぞ属やしを維

新の際しく

今の不韓の脇

りしところ

又判を中断する五月(サツキ)川は源を大和の宇陀郡山中に発し

し下流は山城に入りて木津川となる此川或は断端

川に帰る

○石打屠山頂は月瀬に属す 南に行く石打村

を経て(尾山の附近より)瀬に沿ふて丸さまを見るべし路は其の

奇勝の一班を窺ふを得べし 而して尾山より見れば

第に隔る雲の月瀬を望みて下に帰る大谷一目

千本八等八谷の勝を望みて数町の間は在るを人をし

て恋慕あらざらしむ(景)

○梅(名)あらざらしむ 八幡(桃)に 月瀬

舟を浮けて上るも月瀬の勝を月瀬十尾山

からも八五月瀬の勝を尾山から見るを可とし尾

山の流を月瀬となすを可とす、而して此説を全
せし眼界の中に入るもの殆ど皆な月瀬橋に
止まり、此の橋尾山月瀬の境界をなす橋桁
石積にして長さ凡八十四五尺巾十四五尺許にして
昔は之なく前は舟渡しなりしとぞ
橋より東南の…は尾山月瀬村の…
は其の景色の七八分はここに没し…
まことにあれども新しき説なるもうつくしき…
まで…美を観ふと云ふも…和するにあらざ
れば…の美をなし能はざるの境あるなり、蓋し是れ尾
ろき云ふ味に於ける月瀬なりと云へば更に梅谷

の流をかくさる一つのものなり 尾山十月瀬十勝をも
以つて梅渓の…とすさいふを得るなり、
梅蹊の梅渓の両端に在るを以つて尾山月瀬の如
き兄弟の関係あるを見るも又是れ一河航路の通
するなり、一幅横巻の画中しこれなくんば和唐風
頭館尾の感なき能はさるなり
○蓋し梅渓…最も多く花の…
此の一事を以つて論すれは梅渓中概ね…を遂
に推さいるを得ず、是れ此の尾山月瀬を經る
較々…くこれなきんとすれば旅客為めに十
数所、道を二分せさるを得す、ここを以つて人多く尾

山月ヶ瀬を看て直ちに全貌を得して思ふ月瀬の梅
は意外に積疎なりし事く道を去りして見るの信く
なりしこれ実は梅花を見ずして軽友
月旦すべきの也、此は八谷村の花に罷てあり梅林村
新村の化せざるを見る梅ヶ堂は皆此の花と見えん
余今を其の面目を維持す、これを見るなあらざれば
月ヶ瀬の梅を見たるものと云ふ可らざる也、またこれに志
幹枝を交へ而して能せしむ補察林を寄せるさ山の上一真
に天地の奇観あるを詩人の梅山宮ま乃みあら
山部る梅の間に在るを云くまでの敷て此らる
指を溢辞にあらざるを知るべし 但此

十一……梅林に立寄るべく
而して帰途を過ぎ月ヶ瀬梅林を過陸上を行くことは梅花の背を
看るの不便なるも、見る可の地の境を離れ
前も頗味なし不満なるん
○梅林の調査を以て論ずれば梅ヶ畑甚だしき
一日に越を差し風景を以て之を言ふは
月瀬ある山を隔てゝとあるの也 甚し備山月
ヶ瀬は寂寞の境を梅林の比するは地域狭
隘なりし山谿の本来面白く勝ての近き未
しるは梅の風致を添ゆる所梅林と並
風光雲なる也、これを湖月楼附近の山岳に比し

其の佳致ハ未似て却りて嵐山の桜樹ハ此の境
の開濶に一籌を輸すを思ふ、梅林ハ鬱々たるも
樹跡を存するに至らさるものなきにあらす、谷間ノくに
薄ツスリと白烟の立て一簇の如くなるごとく見ゆる
亦賞客の佳味ありて[illegible]の価位ある
也、勿論不足を云くは其の鍛葉の点に一瑕の梅
樹ハ数株の桜樹を雑ゆるところのことき注文なき能ハ
すと雖も、何れの処にも評判ある処の事となる
こと評判なるを聞えなかりしを以つて其れ
ら之れに就(?)て、多くの注文をなさい
まじい、但此一事の保勝(?)に[illegible]

梅樹の境美にすみ(?)[illegible]佐の風致末の境界
ことを言を改さんことを明ち甚んなり
〇山水の奇観も文士の筆を以て称さるゝ母にあらん
か、月ヶ瀬の境、固と風流韻人のみに加へ給ふ
もしとなるにあらさるも、風月[illegible]梅樹も[illegible]ある
村民糊口のためにも梅を植えたる業利の目的に[illegible]
即ち東都に梅年々売るる数千本の梅の実を[illegible]
京都にて[illegible]京阪の材料に供せんとしたるに
依る也、然も業利の目的のみして此の業利の種類
ら天下の奇勝と呼ばれ騒客韻士の賞覧を
博するに至りしを僥倖のことゝし[illegible]

保存すべき何人とあれば大体の図案名所の手
に来る山水の布置結合の配合改善をなす上
に於て手をして樹木草花を補ひしむるも見らず
しも完全なる一般に此の地の旅樹を見て風雅的
見地を以て湖を見て風雅人に憧憬せしめたるを要し
又も甚女の結果美術家を驚倒せしめたる
もの如きもの能はざる山水の美
京都の天然の名山水を風致ある樹木を配置しめ
綴すべきあるは一つの美観を一の布置配合に写しき
を得たるに由らずんばあらざるなり
○此の如き状態なし京大坂附近になきはいふまでもなし

多くの人を感ぜしめたるのみならず、土地の所々に
風致も本来素より加工せるものに、郊外の地に土着
して保存せられたる的なるを、ここに存する寥寥たるさ
りしを以て随って此の地の景に保存せられしも古
れおそし、あるいは地の名をする人を驚かす事を唯る
ことなる四五十年前即ち宝暦の頃京都の人祇園
大雅蕪村等の名家をしてはじめて此の地の勝を記し
歌ひて支那の初め西伊勢山田の詩人韓聯玉その勝
を詠じたるの文人あるもし月瀬探勝の記の出でてより
而して後天保元庚寅の年斎藤拙堂此の地に遊
び月瀬記勝を著はしてより初めて広く天下の

注目を惹くまでもなし
○梅屋（月桂）の梅京近の諸書に三高様あることを京ふ果して我
にやむやむ一つとしても從的京紅の材料となる書ん的梅
の實を東京郡に送りし此にも其の品數を云ふ万品以上
に上りしことあるを其實たり、我る國紛ては外國
の品物輸入となれ其の洋紅染料の價も内國の品と
比すれは廉なることを云しけれは今も高貴の染料は
あらされは京紅を用ひさるなりとて限りて材料なる
梅の需用も著しく減じたるより月ヶ瀬一帯と
大いに收入の途を失ひ、而して梅樹を伐採し米麥
作りて新山産とせし處風致ある土地を拓いて田畑を
なさしむるか爲めに風致を大切にすへきなれはなり
心あるもの之れを概し月瀬保勝會を設立し今日まで
も漸く風致維持に注意してありしことなり
○烏梅製造　烏梅を論して月瀬梅林の一大産物たる謂ひ
在るは紅染料となすへき梅の實を焙炙法を行ふ所
にて烏梅は紅染料となすへき梅の實を錯ずるを和して
之れをフカスを法とす、ここを以て黑梅の稱あるも夫の
烏梅といふは食料に供する梅也と在所に於て前川氏にて
する烏梅製造の數は十個を陰乾す、一個を熟ひ事なくを
從して燗金に就く時ならは、雨漸く去りて蓄
へ置くなるし

十二歳大坂に留しに

○第五回内國博覧会を観る

博覧会見物に大坂へ出かけんと待ちまうけてありしが漸く又
しばらく待つて四月に博覧会の見物が出来る様になつ
た、即ち三月下旬の開会を待ちかねて旅装を整へて間もなく通り三
日の午前九時に旅宿を出て今宮へと車を走らせ
たところ案内をして呉れる名美様と云ふを誘つて博覧会正門
前の広場に出づれば開会式を挙げんとて待ちかねたる大縁
門あり之を入りて先づ目に映ずるは大阪朝日新聞社
会の出品にかゝる剣装八頭龍の噴水器が装置

したる倶利迦羅竜が剣立の剣にからみ付けるを仕
てたる姿であるが價を一萬八千円と書いてあつて其の
く高價なるものであるが、我々は雖何とも云へぬ位であるも
これを見ると工藝美術と云ふ感じが起らないで、何
となく本尊の不動尊の想ひ出さしむる、北の唐破風
を中央として右方に本堂の三大広間があり、左方に
愛染明王の三大広間がある、本堂の大広間を観様の大
きいと云ふ丈で別に特記すべきものとの
云ふ所であるが、右の言を飛ばしたるを愛染明
王の大広間、例の實張大き庭を堪へ持つ「」と云ふ俗文を
愛染明王の扁額となし其の後、天司某氏をたつることい

に建設したるもので金光燦爛たる一双の鯱を戴き白
堊壁に雄大なる四重五重の楼閣を高く聳えた
容を有す、荘厳正麗なる驚き思あらしむるも、
中庭に本堂正門前の場にも又幾人の注目を惹
きしものもよく云へたものである、噴水器の正面に正
門で、其の左右に観覧券を売る所がある、ここに観覧
券五銭を払つて正門の階段を行くのである
北の正門は解剖した如き木材を漆喰とべたべた化粧
らしてあるのであらう、新らしいものであるが三流で
其の真白のところを「マアーブル」と見まがふ位だ、
内部に入つて上下を仰いで見ると上下幾つと位

粧飾も集りて居るものは陶器花瓶植物のペー
ブメントの如きである、これは構内を飾るに、場内美術
館及び一の立像がありて、其美術館は二層楼で、突
付の立像は藝術として立つて居るは左右両側には、
工業、其業教育林業水産通運機械等の諸館
が駢列してある、其中間に花壇があり噴水があると
左右の通路に並べて居る花壇に沿ひて腰掛が設
けて据えつけてある、体勢が甚だよろしい
それから完全の境内の十万坪の広場である、その諸
館の諸構内の各国館に前と同じものに比すると
小さくなつて居るから、総て博覧会らしく見え

それに
正門を入ると左手に工業館之れに續いて教育
館其次に機械館と一列にならんで居る又右手には
農業館これより林業の二館に一棟の内に聯合
して居る通運館水産館何れも皆右
側にあるが、此内尤も大なるものは工業館で殆んど
各館列館の半分を占め自分の見込としては、殆ど工
業館の坪数は五千坪ともいはれる位なもので

美術館は前にも書いた通り場内の縦列からは其位置の北方に
新築して見えるは場所の一と書いた其れ位の大

前様の欄字女開設して市中に運搬させしもあり
住ひあるもの多く縦覧列をなす、これ大分日子を要する
ことなき容易に推量さるる住ひあるが、諸館の内陳
列の大略論んずれのは工藝美術農業教育諸館ひ、機械館
通運館なども何れも完備して見るべき者多し、諸
外国より陳列したる各國館 カナダ館 ホラン館
決藝廣くなんどのめずらしきもの多くして庭人ら開設してあ
る住、其余のごときも十の八九もまれ旨其完中
ひ転て指を蟻の歩みするとあつて見るもあり、何れ目ひ
も服前する品は通る数ふ、色ある品を見るに日本風號る
大阪の人気なる石は張ひあるこそ、日本國の陳列

第十 第一期は通覧開き会ハぬ」と云ふ博覧会
第九 指を第一の外人の云ふもよき思ひ付くのもなれども
なりし二月廿八日のは陳述する各館皆営業を始め
て完成し行きつつと整頓して其の日ありつれのが
術枚の新に接ひ見るを聞きし開会式と全く片
付いた日と云ふのを窺ふ不思議と云ふ人も多い住ひ
ある
余も先づ之を進みれのも正門の左側工業館ひある、ここ
にも案及縫数、染織類、様積及冶金、化学工業館
経営物数出品業者買應出品を陳列して
ある、就中出陳のものの多きは染織類の全く工業館

の四分の三の価格を占めて居る、之れは驚く可き需要で
化学工業と陶磁器の製造、紡績の如き種類も採掘冶金
又鉄もあるが、これらの事業は発達を経るに従ひ
ハまたは其の率を増進しないのである
工業館の入口を入ると先づ眼に入るものは我が紡績の彩旗であ
つてゐる、どんな工合かと見えてゐると、ここに如何
て居るが附いたのは、陳列の仕方の殊におびたゞしく、御数
おどろくことがあつた、即ち我が紡績の様に女子紡織の
工藝品全体を陳列する仕方が、機械の部に陶
磁の部とも分類して大に意匠を凝らし其部分は
又各種類の某なり陶器なり（回金石）なるものを陳列し

なるも、如何にも比較研究上には便利であらうと思ふ、需要の
如何なるも都合よくあらん、唯だ一般の来観者を目標とせん
とするには不便を見る人の心に徹し難いのであると云
ふ点、此の部類が陳列は比較的便利であらん歟
我国の陳列品が如何にも満足なる眼を惹きもするが一寸寄
目し得べきもあらず、夫れ故品物を品騰するごと
きもなく利益あるの観覧の会とて得べきもの（回）であらず
高知なるも未だ色々なるを如何にも注目しなる者なきは洋き地
をなるもなし、ちなみにも唯だ未だ色々なるの後、然るに其
しても得るの比較的一つある、夫れは何うと云ふに我
邦人の巧緻なる手法に陳列の意匠の如何にも巧妙な

○事もあり、其の二三を挙げてみようならば、先づ名
高き吉原の妓楼は凡そ二十軒位で、其の見世の中央に思ひ
くの門を造り、此の門の上より其高級の名を染抜き
たる彩旗を立て、門を入ると左右の奥行ある所へ、其の高
級の品々が順番よく陳列してあるを云ふ、飾る陳
列大体の模様であるが、此の各店の前なる模様を一
ようなる人目を惹くには並ならない事で、殊に此の
二十軒もの店を総て撰んで人の観覧目を惹き
得るは、実に各高級ならざるの芸人を此処に集め
なる上手なるも、其の妓里にて知れあるに至るに
以ての千態万様なるも、少しくイキカゼレートまで

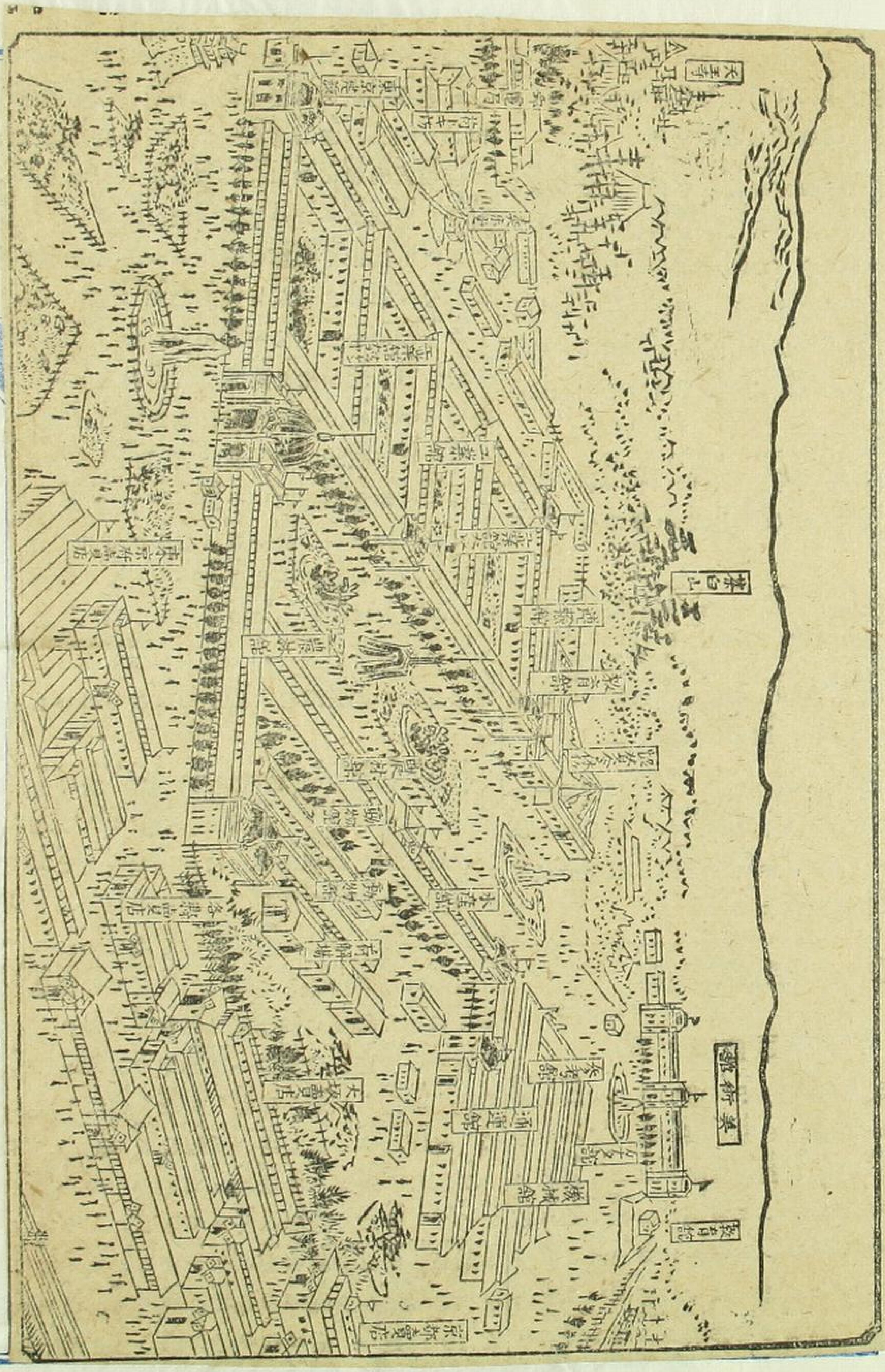
云ふ風に陳列品の意匠の趣向を凝らしてある、門先きの意
匠の場合に会ふ入口には紫の幕が張りてある、例へば遊戯
其の中に提灯ら飾りつけてあるを云ふもの多き提灯と絵本
をば店提灯もあれば、すき紙すら多く用ゐてしたげてある
をも見ゆる大路あり、大閤の縁あるをも云ふ人千歳
瓢箪を吊るして飾りとなし、伊勢の大神宮の縁起
しまするなど云ふ者あり、山鉾を飾る、静の舞を
[illegible]
[illegible]
らへ千万もの物品をもってあり、之を以て飾りてこれを
大尽姫ならひば、花魁もヘチマで以て草鞋を思ひし
吉原通を獺にても由武と五十軒一杯に其の姿を以て

旭日を描き出して、或は梅花を点出するを蒔絵の如
くに梅花を彫刻し、金銀の如きは佛像までも黒漆
を以つて塗られたる黄金の巻絵の施されたるも、白縮緬
を織り出したるは、又横に織られ、今それを云はるゝも是
織物をこしらへるも蒔絵の巧なる物の様に織られて其美人
目を驚かさんことに満足したる其の芸術の妙を極め
に悦ばしき眼も覚めてられて大儀をも忘れさせる
を得るは、之れ全く東京の技師人がこの貴重
に富むでゐることを感謝せさるを得ないのである。而して巧緻
を尽したる雄大の意匠を凝らしたる試みを即ち此の海
外の芸術を養はるであらうと思はれる

此の館内の出品は誰れの目にも殊に大きな品は
海軍省の出品に係る軍艦の模型及其の三式八吋速
射砲及の保式十四吋速射砲及其の大阪砲兵工廠の
二十八珊米榴弾砲及び其の小さきものは一尾の
四万兵の島津公爵出品の同国山ヶ野金山から採
掘せる純金塊重量方二貫五百四十匁二分九厘と
云ふ絶大（小判にして）其価格は門柱に折つてある人
の門札の数と大振りのものにある、而して其価格は
壱万八千七百二十円四十五銭と云ふ札が附し
てある、これは多くの観覧人が驚嘆するもので
あつて、実に館中の一番目を惹きし価値の（價）

貴いのもこんなが第一つであることであるから、此外信者の為に子の
綱の見ても出て、居るし、又山形県の最上郡からも寺もす
る燐線が吹つて塔を築いて居るし、其の築き方が
めずらしく巧みで、難なく誰れの目にも慈いに連来
であろう
工芸品の鋳つて満たるのもとる裁方鋳物でこゝろもと各部有名の
省直轄工業の出品が全て飾つてあるが従来何れも
此の医学及衛生の器具などが、印刷此の、鑞
の模型此の測量機械などは日も見る丈けだ、要し
く調べたら限りなき事の多いであろうじの、工芸
鋳物と此の事を云ふて微々たるものは其の方今の
一部分位であるし、此の鋳の陳列品中に在る人目を
惹き易きは数人の群つて居るのは医科大学出品の
蝋製の人体模型である、癩病患者の手面などの、咽
喉の機関部並に咽喉が大いに見える羅も喉頭癌
糜乱せる標本など其の外大小の模型を見るにも人
をして悚然たらしむ
工芸品鋳物を与えて業の二鋳と聯合して一鋳をなして居
るが、鋳の半分以上は工芸品の占領して居る、抑の性
質上陳列のごときも複雑と思ひの外、この全ての
工芸品鋳を比して鋳物もあらうが意匠を凝らし
て居る、一例を挙げれば青森県の川の底様を称する

打みて葺きおろしにするはよからぬ、又婚禮の祝儀の返礼を
熨斗を以て葺き下し、又同じ熨斗を五色のリボン
にて奇麗に結び之れを籠に入れ差出すことあり、又
うつくしき風流なるべけれど此は婚礼ならぬ年
賀の熨斗を積み重ね轄出するそうだが、旧四五年
の頃より中ごろには之れを用ゆると云ふ事に、又贈答
林檎の如きは贈り物を遣るにも若し此の品を入れば構
を用ゆる時は書付の結び方など今も
めでたいし、如何の詞は贈答の際の包
を以て陸羽地方の仕方を用ゆる事に従ひても出
其の贈り物ある、又大坂市の出品は墨夫を以て門
を遣りたることなきもなき贈答品である
柳子林檎の如きは秋田杉や青森杉の箱に入れてつ
てぞろまなり風しく心地よく見ゆる、久しくなる、
錦繪類の如きまつて見るも古代の珊瑚珠を
くわしる所、三越呉服の赤木本の出産に
辛子を以て工風したる人造真珠など
ひあり、蒸菓子出品の熱漬に出でて
つきの其の出品人の助で、義太夫の
とくるもの其の物の
まつて見るもの一ツ不足しうつれ
森銀運出を



第五回内國勸業博覽會全景

奈多鉄道も同じく私設である、即ち山陽鉄道会
社や大阪商船会社ら私有せる交通機関を陳列されたるを
設けられ又其建物の如き坪、陳列してあるものの壮大な
ることあるから鉄道自ら営業として居る、私設なれども
思はれる位で、鉄道前に沿革の信號柱が二三本立つ
てあるこの鉄の前後に在る鉄道を鉄軌が走
設けられた山陽鉄道会社出来事の機関車が二台並
を据えて並んで居る、陸運会社も営業をしてゐるを
今回の驚くとも云ふべく、其他の交通運輸業の
漸やく進んだと思はれる心持がする、此の
機関車の所で尚ほ見ると出来上る工夫が出来た際にあるのである

東京榛原製

第三回興業債券
募集公告

一募集總額 金三百萬圓
一債券種類 五十圓、百圓、千圓
(無記名利札付トス希望ニ依リ記名ト爲ス)
一利息 年六分
一申込價額 額面金額以上(錢位ニ止ム)
一證據金 百圓ニ付金五圓
一申込期限 來三月二日ヨリ同月十六日マデ
一拂込期限 來三月二十五日ヨリ同月三十一日マデ
一償還年限ハ十ケ年ニシテ來ル四月一日ヨリ一ケ年据置キ其以降一ケ年毎ニ二回抽籤ヲ以テ償還ス
一利息ノ支拂ハ毎年四月、十月ノ二回ニシテ拂込ノ翌月ヨリ當該月マデ

秋夕 一

第五回内國勧業
博覧會案内地圖

これを見て換ける夫の沈没を以つて我らの父兄を追
うたる商船学校の月島丸の於ける者が出陣されてゐる。
が時々沈没するや即ち機械を追懐せしめつ、此の人力
但轉車貨車ー等々ある所謂運輸の機械を集めん
とするが、よき思ひつきと之を集めたのは内国勧業
今般が四十弐種の運送車ーの模型を製作しつ
て陳列したのである、これらは鄭寧に解説して
其のころ車の研究には頗る便利である、目的は
寡の日本全国の現在ある所の車ーの種類を寄
せて之を思ひ立ちたる者この四十弐種を得たといふこ
とである

第五回內國勸業

博覽會案內地圖

博覽會場內案內大要

◉第五回內國勸業博覽會は大阪市今宮に設置し明治三十六年三月一日より七月三十一日まで之を開會するものとす但し動物館の開期は同年五月一日より同月十五日まで及同月廿六日より六月九日迄とす

◉開會式は明治三十六年四月（未定）に褒賞授與式は七月一日に閉會式は七月三十一日に擧行す開會式には天皇陛下行幸あらせらるゝ筈なり

◉博覽會場の敷地は十餘萬坪にて之を構內構外に區劃し構內における各陳列館の建坪は大約一萬坪なり

◉出品物は其數二十六萬餘點にして出品人の數は二十二萬人餘なり之を前回に比較すれば其點數及人員は殆んど數倍の多きに達せりといふ

◉一切の出品物を陳列する陳列館種類は下の如し即ち農林館、水產館、工業館、機械館、教育館、美術館、交通運輸館、參考館とし外に動物館、溫室、冷藏庫あり堺市には附屬水族館あり其他臺灣館、加奈陀館、ホーン館、アンドルス館、通運館等の特別館あり

◉觀覽手續の大要下の如し觀覽時間は普通午前八時より午後五時迄とす觀覽人は正門、通天門、阿部野門の何れよりも自由に出入することを得るものとす

◉觀覽券は一枚五錢にして一人に付普通日は一枚日曜日及大祭日には二枚を要す但し五歲未滿の者は之を要せず觀覽券は入場の際門衛に示して入鋏を受け退場の時之を門衛に渡すものとす

◉杖傘手提類を除く外は荷物を攜へ又は畜類を牽ひ入場することを得ず又各陳列館內に於て喫煙をなし建築物を損傷することを得ず出品人の承諾を得且つ事務局の許可を受るにあらざれば陳列品を撮影又は模寫することを得ずまた各陳列館內の光景を撮影または模寫せんとするものは事務局の許可を受ざるべからず

美術館は靴、上草履を穿ちたる者の外出入することを得ざるを以て下駄を穿ちたる觀覽者は美術館前に在る預り店に於て上草履を借用し下駄を脫ぎ換ゆるを要す但し其借賃は二錢以下とす又た美術館には杖傘、手提等を攜へ入るを得ず

◉出品物は非賣品を除くの外は之を購買することを得べし賣買約定濟出品には賣約濟の附札を貼附して賣濟品と區別す購買したる出品は總て閉會中は之を場外に搬出することを得ず

◉構外には各府縣の賣店あり數千人の營業者は全國各地の物產を定價にて販賣し觀覽人をして容易に土產物を得せしむるの便利を與ふ

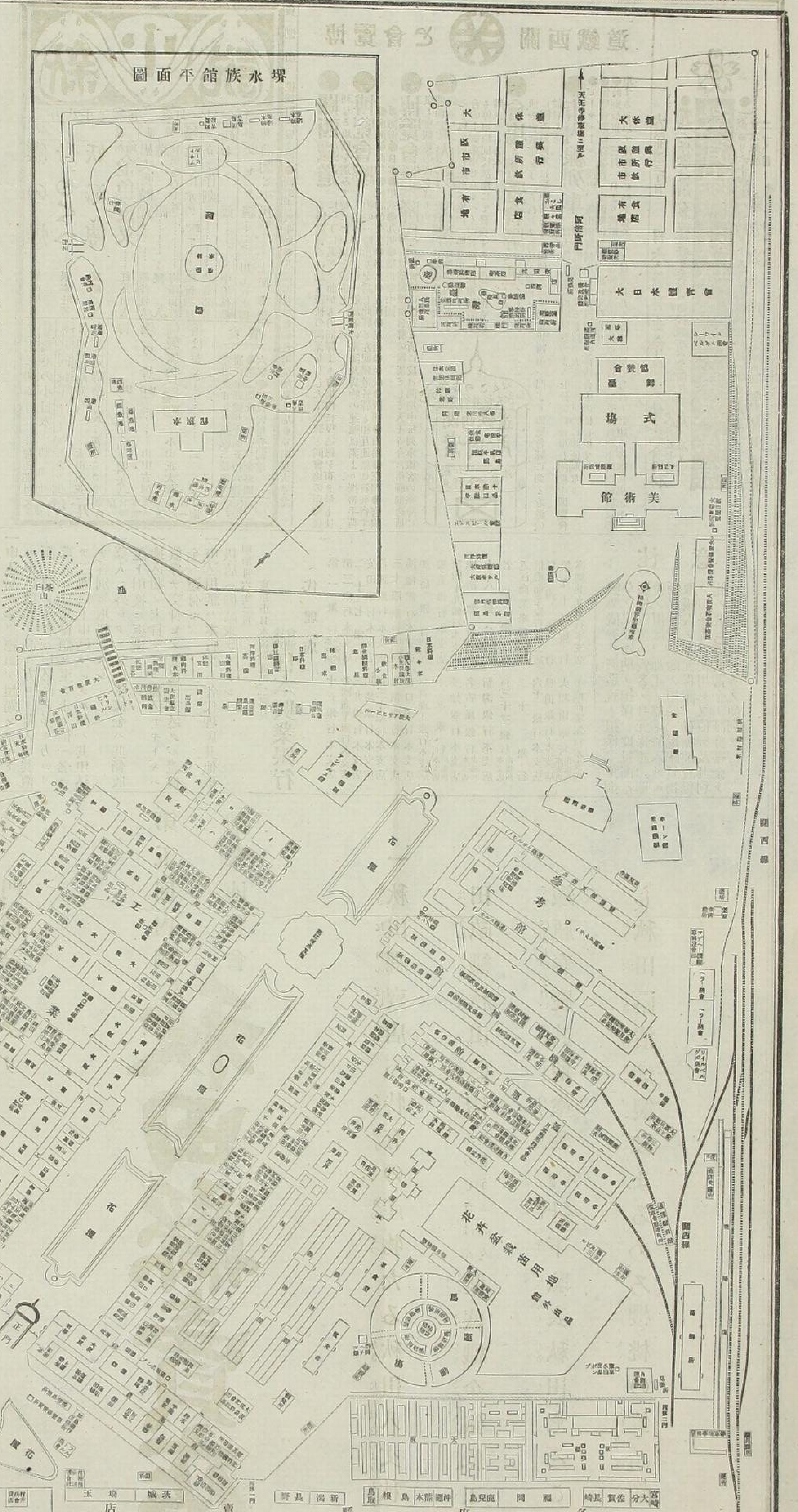
◉內國通運會社は構內及構外に各一ヶ所の出張店を設け出品物若くは賣店商品の運送に關する業務を取扱ひ觀覽者之に依賴せば極めて便利なるべし

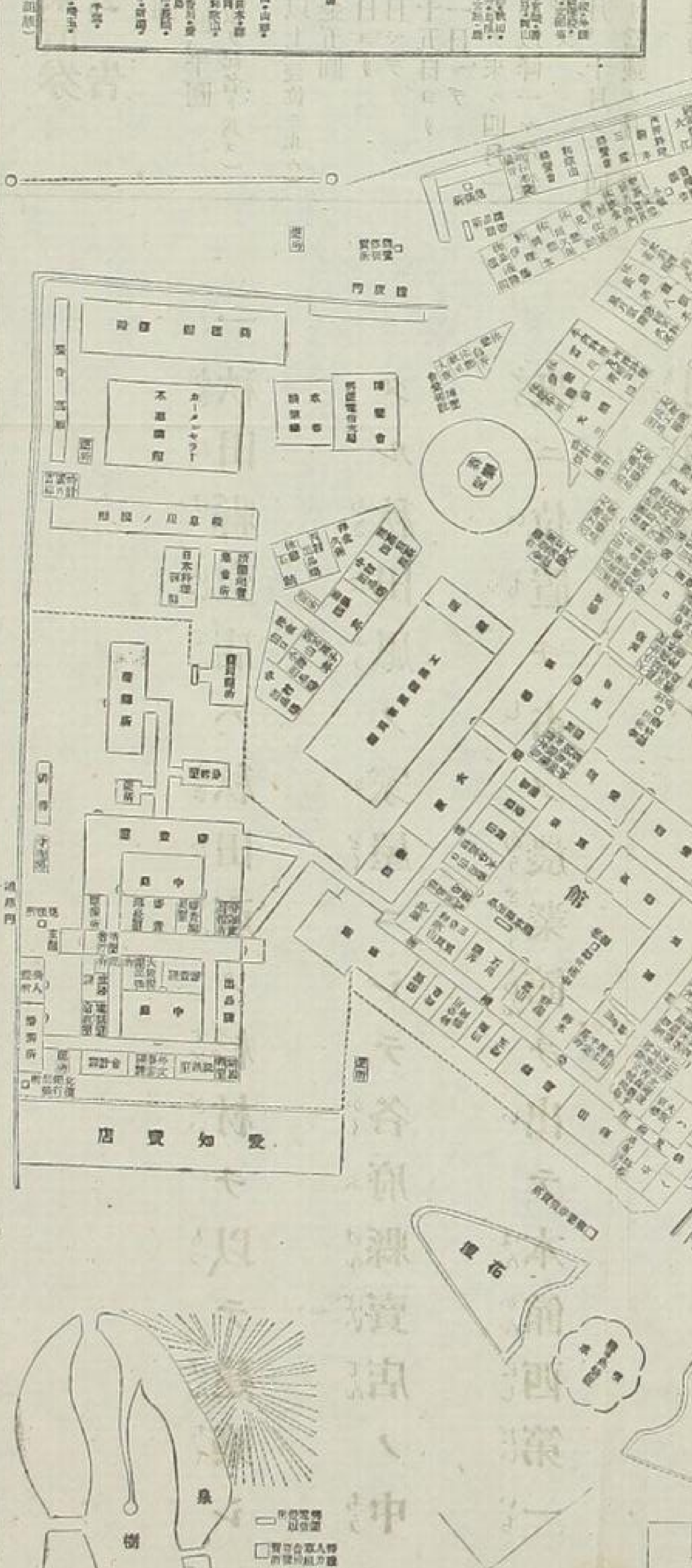
◉構內に郵便電信局あり構外正門前に郵便受取所あり共に郵便、電信、爲替小包郵便等に關する事務を取扱ひ又關西鐵道會社は博覽會停車場を設け會場に於て自由に乘降する便宜を與へ尙數ヶ所の鐵道案內所を構內に置き觀覽人に旅行上の案內的說明をなすべし

◉全國の官私鐵道は明治三十六年二月十五日より八月十五日迄の間旅客運送賃金の一割乃至二割の割引をなし博覽會觀覽人の便宜を圖れり其割引證は社務分は各地方廳郡市役所に於て之を交附し歸路は在大阪各地方事務所に於て交附するの定なれば遠慮なく請求せらるべし

◉大阪每日新聞は美術館外西南角高燥の地に接待所を設け購讀者に接待券を頒布し其券引替に茶菓を饗し場內外諸興行物の割引券を呈する等案內の設備周到なり

凡例





第五回內國勸業

博覽會案內地圖

博覽會場內案內大要

◉第五回內國勸業博覽會は大阪市今宮に設置し明治三十六年三月一日より七月三十一日まで之を開會するものとす但し動物館の開期は同年五月一日より同月十五日まで及同月廿六日より六月九日迄とす

◉開會式は明治三十六年四月(未定)に褒賞授與式は七月一日に閉會式は七月三十一日に擧行す開會式には天皇陛下行幸あらせらるゝ筈なり

◉博覽會場の敷地は十餘萬坪にて之を構內構外に區劃し構內における各陳列館の建坪は大約一萬坪なり

◉出品物は其數二十六萬餘點にして出品人の數は二十二萬人餘なり之を前回に比較すれば其點數及人員は殆んど數倍の多きに達すといふ

◉一切の出品物を陳列する陳列館種類は下の如し即ち農林館、水產館、工業館、機械館、教育館、美術館、交通運輸館、參考館とし外に動物館、溫室、冷藏庫あり堺市には附屬水族館あり其他臺灣館、加奈陀館、ホーン館、アンドルス館、通運館等の特別館あり

◉觀覽手續の大要下の如し觀覽時間は普通午前八時より午後五時迄とす觀覽人は正門、逢阪門、阿部野門の何れよりも自由に出入することを得るものとす

◉觀覽券は一枚五錢にして一人に付普通日は一枚日曜日及大祭日には二枚を要す但し五歲未滿の者は之を要せず觀覽券は入場の際門衞に示して入鋏を受け退場の時之を門衞に渡すものとす

◉杖傘手提類を除く外は荷物を携へ又は畜類を率ひ入場するを得ず又各陳列館內に於て喫煙をなし建築物を損傷することを得ず出品人の承諾を得且つ事務局の許可を受るにあらざれば陳列品を撮影又は摸寫することを得ずまた各陳列館內の光景を撮影または摸寫せんとするものは事務局の許可を受ざるべからず美術館は靴、上草履を穿ちたる者の外出入するを得ざるを以て下駄を穿ちたる觀覽者は美術館前に在る下足預り店に於て上草履を借用し下駄を脫ぎ換るを要す但し其借賃は二錢以下とす又た美術館には杖傘、手提、筑を携へ入るを得ず

◉出品物は非賣品を除くの外は之を購買することを得べし賣買約定濟出品には賣約濟の附札を貼附して賣約未濟品と區別す購買したる出品と雖も開會中は之を開場外に搬出することを得ず

◉構外には各府縣の賣店あり數千人の營業者は全國各地の物產を定價にて販賣し觀覽人をして容易に土產物を得せしむるの便利を與ふ

◉內國通運會社は構內及構外に各一ヶ所の出張店を設け出品物若くは賣店商品の運送に關する業務を取扱ふ購買者之に依賴せば極て便利なるべし

◉構內に郵便電信局あり構外正門前に郵便受取所あり共に郵便、電信、爲替小包郵便等に關する事務を取扱ひ又關西鐵道會社は博覽會停車場を設け會場に於て自由に乘降する便宜を與へ倘數ヶ所の鐵道案內所を構內に設き觀覽人に旅行上の案內的說明をなす

◉全國の官私鐵道は明治三十六年二月十五日より八月十五日迄の間旅客運送賃金の一割乃至二割の割引をなし博覽會觀覽人の便益を圖れり其割引證は往路分は各地方廳郡市役所に於て之を交附し歸路は在大阪各地方事務所に於て交附するの定なれば遠慮なく請求せらるべし

◉大阪每日新聞は美術館外西南角高燥の地に接待所を設け購讀者に接待券を頒布し其券引替に茶菓を饗し場內外諸興行物の割引券を呈する等案內の設備周到なり

凡例

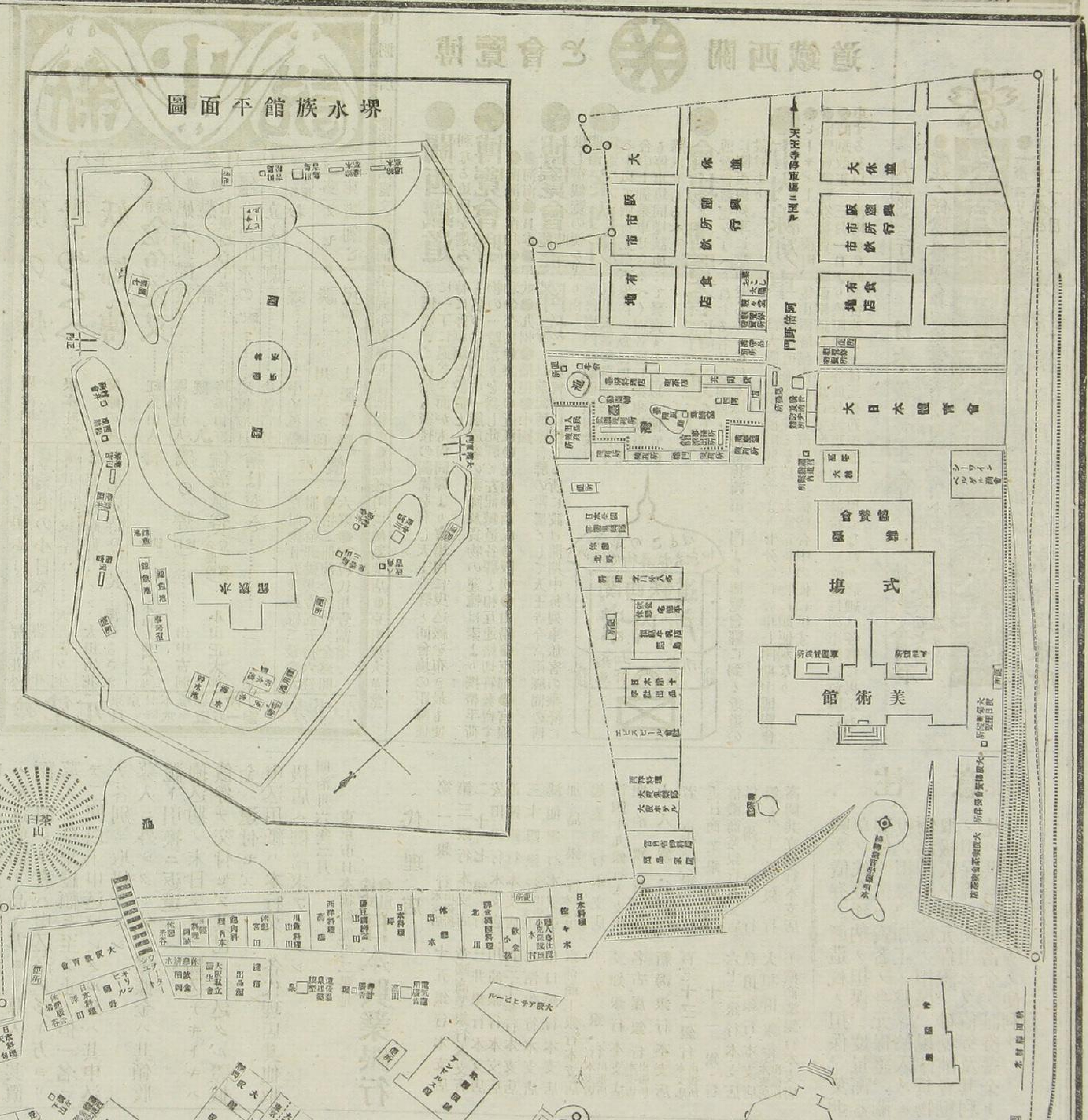
教育館

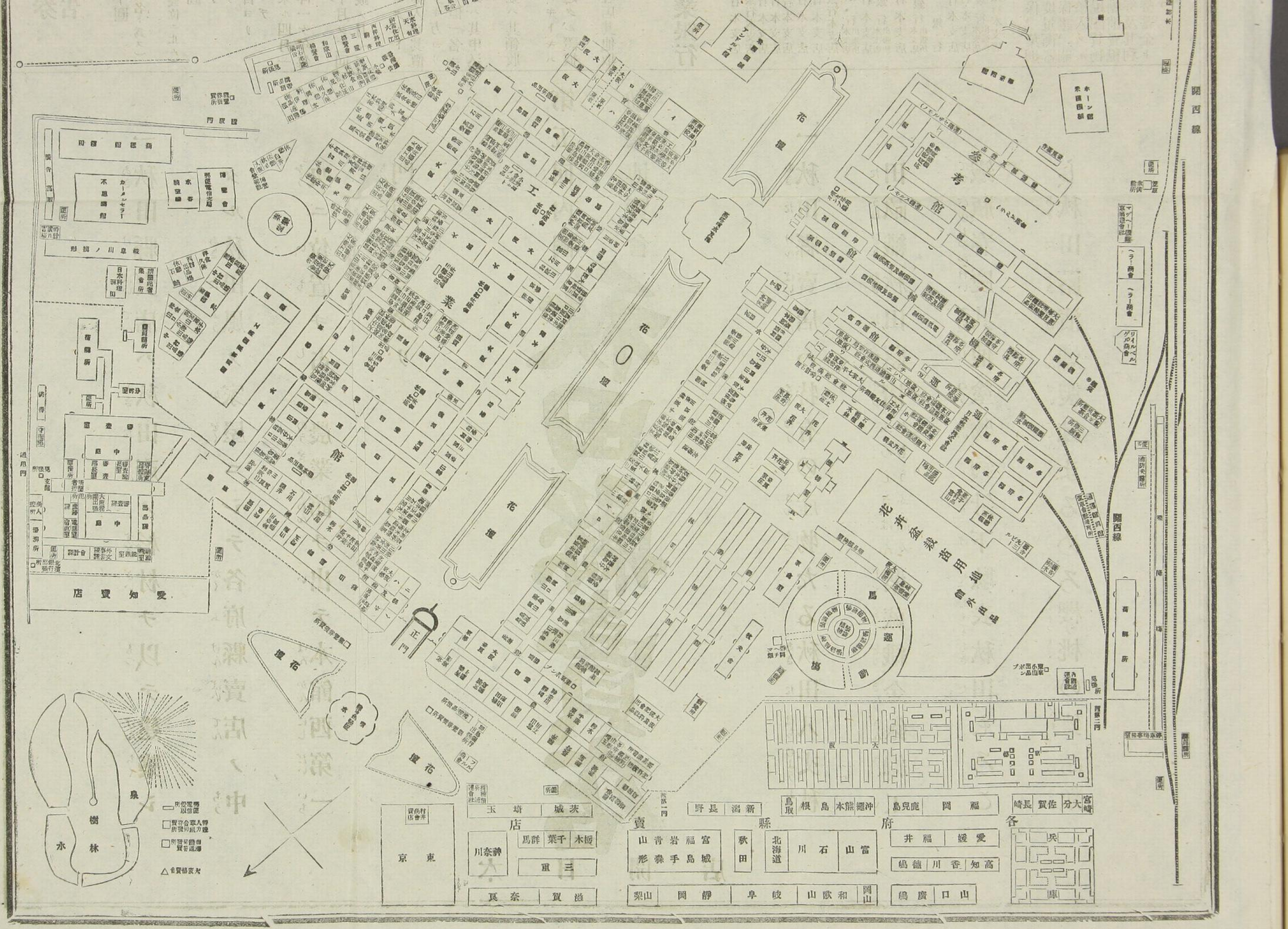
運輸館

工業館

林業館

(大阪每日新聞社活版部印刷)





愛知賣店
各府縣賣店
東京
茨城
埼玉
三重
滋賀
奈良
栃木
千葉
群馬
靜岡
山梨
岐阜
和歌山
岡山
廣島
山口
高知
香川
徳島
愛媛
福井
石川
富山
北海道
秋田
宮城
福島
岩手
青森
山形
新潟
長野
沖繩
熊本
島根
鳥取
福岡
鹿児島
長崎
佐賀
大分
宮崎
兵庫
花壇
正門
工業
參考館
關西線
運動場
樹林
泉水

祝第五回博覽會開場

三月一日ヨリ

開會おこし賣出し

大阪市嶋ノ内笠屋町
合資會社 湖月堂
電話東六百〇七番

★

大阪市東區高麗橋三丁目
株式會社 百三十銀行

●日本興業銀行第三回債券募集
●申込期日 三月二日ヨリ同月十六日マデ
○募集總額三百萬圓 ○債券種類五拾圓、百圓、千圓（無記名利札付トス希望ニ依リ記名トス）
○利息年六分 ○申込價格額面百圓ニ付百圓以上（錢位ニ止ム）
○證據金百圓ニ付金五圓 ○拂込期日三月廿五日ヨリ同月卅一日マデ

●北海道拓殖銀行株金拂込 壹株ニ付金拾圓
●拂込期日 三月一日ヨリ同月二十五日マデ

新小說

第八年第參卷　參月壹日發行

小說
- 磯の煙……廣津柳浪
- 舟のゆくへ……根本吐芳
- 妖婦傳……嵯峨の屋
- 新編 金色夜叉……紅葉山人

雜錄
- 娼夫張酷貧……露伴迂人
- 慧語……寒人
- 曾根崎心中考……梅澤和軒

- 漫錄 北英山水の觀……綱村抱月
- 時文 立よ作劇家……後藤宙外
- 海外文壇 お蝶……中嶋孤島
- 藝苑 オセロ談……川上音次郎
- 演劇と平民（會社）……土肥春曙

- 新文 雲に與ふ……兒玉花外
- 淳嶽 桑港の小日本……碧草生
- 共同長屋……天涯茫々生
- 流行 巻煙草嗜好の変遷……太田宙花
- 花見時の服裝……澤ひらさき
- 梅（表紙）……小山左衛門太夫
- 磯の煙（口繪）……山中古洞
- 倫敦風俗（公園の見物）……小山正太郎
- 繪はがき……二葉

價
壹冊金廿五錢郵稅二錢 六冊前金壹圓五拾六錢 拾二冊前金參圓 郵稅共 郵稅代用壹割增

發兌元 東京日本橋區本銀町四丁目五番地 春陽堂

賣捌所 備後町四書文館 同町吉岡平助 北濱博報社 備後町岡嶋新聞店 京町堀大雅堂

博覽會と關西鐵道

●關西鐵道と博覽會とは最も密接の關係を有し天王寺驛と同會場の距離僅に一丁に過ぎず而かも同驛より會場內に曳込線を布き最も便利なる場所を選みて特に停車場を設置し

●博覽會驛と名づけ開期中一般旅客の乘降及貨物の運輸は素より携帶手荷物の一時預りを爲し此驛と左記鐵道各驛と相互連絡切符發賣す
●南海 ●南和 ●紀和 ●奈良 ●參宮 ●近江 ●尾西 ●西成 ●阪鶴 ●山陽 ●京都 ●官線 ●河南 ●日本 ●甲武 ●九州 ●播但 ●中國

●博覽會臨時乘降場 は前記博覽會驛の附屬として天王寺今宮兩驛間の博覽會場に接し設け開期中每列車旅客の乘降に供し御觀覽の便を謀り尚

●案內所 を會場內に數個所相設け關西鐵道汽車旅客の御案內に供す鐵道旅行上御不案內の點は掛員なく御問合を以て御乘車せらるべく尙各驛行乘車切符も停車場同樣該所にて發賣するを以て便宜御購求せらるべし

●會場と博覽會驛の通行 博覽會觀覽を了へられたる各位が場內より直に關西線列車に乘車せらるゝの便を謀り同會場西第一門より博覽會驛に到る近道の設けあり

●市內線列車 は大阪（梅田）湊町間双方より廿分毎に發車し開期中博覽會驛並直通運轉するを以て大阪市內見物に頗便利なり
●ビヤホール 湊町、給山兩驛構內に設け汽車出發御待合中の便に供す
●博覽會觀覽券發賣 關西線道各停車場にて發賣す
●時刻改正 三月一日より湊町天王寺間及城東線列車發着時刻改正每列車博覽會驛に停車するを以て湊町發の時刻從來よりは三分乃至五分間早くなれり詳細は各驛に掲示あり

關西鉄道案內所 乘車切符 發賣所

大阪北濱三丁目
日本教育生命保險株式會社

徴兵保險 [illegible] 保險

●當社ノ保險ハ醫師ノ身體檢査ヲ要セズ ●代理店ハ全國枢要ノ地ニ在リ 電話特東六五七番
●一歲ヨリ六十歲迄ハ契約ヲナスコトヲ得 ●保險約款ハ御申越次第送呈ス

東京銀座二丁目 東京出張所
京都室町通錦小路上ル 京都出張所

第三回興業債券募集公告

一募集總額　金三百萬圓
一債券種類　五十圓、百圓、千圓
（無記名利札付トス希望ニ依リ記名トス）
一利　　息　年六分
一申込價額　額面金額以上（錢位ニ止ム）
一證據金　百圓ニ付金五圓
一申込期限　來三月二日ヨリ同月十六日マデ
一拂込期限　來三月二十五日ヨリ同月三十一日マデ
一償還年限ハ十ヶ年ニシテ來ル四月一日ヨリ一ヶ年据置キ其以降一ヶ年毎ニ二回抽籤ヲ以テ償還ス
一利息ノ支拂ハ毎年四月、十月ノ二回ニシテ拂込ノ翌月ヨリ當籤ノ月マデ之ヲ付ス
一申込高ガ募集總額ヲ超過シタルトキハ申込價額ノ高キ方ヨリ募入シ其價額ノ同シキ者ハ申込高ノ多キ方ヨリ募入シ募集總額ニ至テ止ム但一名ニテ二回以上申込マレタル分ハ其申込ヲ各別ニ取扱フベシ
一募入ニ外レタル分ノ證據金ハ其領收證ト引換ニ返還スベシ
一拂込期ノ末日マデニ拂込ナキトキハ債券ヲ交付セズ其已ニ拂込タル證據金ハ還付セズ
一申込用紙ハ本行又ハ各代理店其他取扱店ヘ御請求アリタシ

明治卅六年三月
東京市日本橋區兜町二番地
株式會社 日本興業銀行

代理店
第一銀行本支店出張所
第三銀行本支店出張所
二十七銀行
安田銀行本支店
浪速銀行本支店
三十四銀行本支店出張所
鴻池銀行本支店
加島銀行本支店出張所
起業銀行本支店
第四十九銀行本支店
明治銀行本支店出張所
十八銀行本支店出張所
若尾銀行
近江商業銀行本支店出張所
信濃商業銀行本支店
信州銀行
第九十二銀行
高岡共立銀行本支店
十五銀行本支店
帝國商業銀行本支店
三井銀行本支店
川崎銀行本支店
百三十銀行本支店
北濱銀行本支店
山口銀行本支店
京都商工銀行本支店
平安銀行本支店出張所
愛知銀行本支店
名古屋銀行本支店出張所
新潟銀行本支店
百三十三銀行本支店出張所
二十一銀行
六十三銀行本支店
秋田銀行本支店
大和田銀行本支店出張所
美濃商業銀行本支店

注意

興業債券ハ酒造税ノ担保、葉烟草ノ代金延納ノ担保、度量衡器製作修覆者ノ身元保證、保税工場ノ担保、加工ノ爲メ輸入スル物品ノ関税免除ノ担保、砂糖消費税ノ取扱人等ノ身元保證、貨物税及其札ハ共ニ使用シ又債券蓄金ノ利ニシテ預入ルヽ郵便貯金等ノ便利アリ

第五回內國勸業博覽會

秋田縣賣店

一秋田縣賣店ハ秋田產ノ杉材ヲ以テ建築シタル秋田風ノ家屋ニシテ各府縣賣店ノ中央ニ位置ヲ占メ農業館ヲ出テ本館西第一門西詰ニアリ

一秋田縣の特有の產物たる秋田八丈秋田畝織、秋田蕗摺ふろしき、はんかちうふ品々紫蘇織金銀細工鐵瓶、春慶其他塗物釣針下駄表秋田もろこし秋田蕗漬燻製鰊まるめろ櫻桃の罐詰類

本日開店

之れを見て接けるを夫の沈没を以つて成るの文名を注

田縣賣店ハ特有の産物たる秋田八丈秋畝織、秋田蕗摺ふろしき、はんかちうふ品々紫蘇織、金銀細工瓶、春慶其他塗物、釣針、下駄表、秋田もろこ秋田蕗漬、燻製鰊まるめろ、櫻桃の鑵詰類

通じて館に接続するを機械館と参考館の二館とする
参考館は諸外国の列品を参考に供するところにて
機械館は我邦製造の機械を陳列するものなり、而
館内は未だ全部の陳列を終らざれば詳細を知り難
けれども機械館中、既に陳列しあるものの中
を以て推賞すべき製機械製造の業を来たしたる
印刷機あるの故を注いでも記すべきなり、三井出品
で芝浦製作所より出せる岩鑽機、上等織
大阪市大井織工所製の蒸汽全自動印刷等機
のごとき二三目を惹くものあるすと見ゆ
熊武木製作所等機の陳列の如きは多いに次

つぎ番ハ機械室(造)ハ製紐紡績の機にあるもと云ふ
ことを得ずへ、巻き館ハ陳列の結構を流石ハ外国
品びけるも拾拔けなりしものゝ多く、流石ハ陳列の
仕方も外国のハべて一本なくてはならぬ。いくらの内国品の
巻ろし方と見ろてならぬ、此館ハ来るも、すこぶる外
国人ゞ係りて比較しハ指かなる、幾多陳列し係つて
ゞ壮観ひあらう、陳列品の四十中八九ハ機械類の
様子見るべけるもれ
是林館の背後なる動物館ゟ至ゟ花卉壇なども見
ど造も大分広んじうる愛を刻きこなる美術館ゟ
至らんと丘陵へ歩を進めた

美術館の建てられてある丘陵は場内でも第一高き所ゟある
地勢を占め、其の前ハ二層の大館が巍然として立ってゐる
さまハ目まさしく壮観ひあつて、エジプトの様ゟ似たが
朝中東京支那橋の擬ゟ此の大館
ハ林くらくを乏さんとて室を従へ支那橋を左手ゟ立
てならも立ちらくの大瞭なる淺草流行の書見の
術ハ長ゟ日ゟを入として三段もあらんならも、美術
館ハ噂ある言あるも出来得る観者をあつめて、これ
ぞ美術家の技術ゟ從の風ゟあるもやうにならし、それぞれの
ゟ巧拙を論ずれば大きさこれの十分一位なれども
プランは同じものだ。飛だ、其の、最も青銅館入ゟ

は未だ陳列されてゐない作品は平たく言へば立派な式
陳出來ない樹木思をもたらさんとするよう
美術館ある所以を貴いそのうちを後せしめず、もしも
詩を作りても、さうひろいこと、ひろい良料を掬んで
薫陶を抑へて居るのも、此の館の陳列も八九分迄も
未だなかなか陳列の仕方が誠に大まかで、陳を
もとめしめたり。己ぎてある類の分会に入れて置く。勿論
此種の品物を同館の陳列品のごとく ゴチャゴチャの併
べる様にするといふのは言ふまでもないのだが、何んなの分体
あい類の氣品をする
までどんな物の陳列してあることも眼を陳の上にする故

つて見ると繪畫 蒔繪 織物 陶器 象牙細工 ふ
どう言ふ陳列品でありながら、どうもこれをと思はるるを
目立つものを覧んと一つも見ないと言ふも宜しい、勿論繪
ふ方面にそのあるに京都の方面の群に秀の刺
繍屏風のうち最も目立つのは西郷徳右衛門の花鳥刺繍
屏風、川路吾兵衛の綴織(つづれ)廿五人屏風を見るにとる
錦華の方面の覧であるが、此の画に於ては橋本雅邦
の瀧の軸八軸(竪二尺八横三尺程のもの)古代
紙で陳してある。而して田をいふあの類、油繪
ともってゐるが一寸目のつくものが見えないのが大概して
平々凡々のものが、みな見せものでしか

前後の文字や机や硯などをそれぞれ例にならつて例のごとく
概して見渡しても茶道家などにも美術上の達
者なき事も認められない、謙虚に思ひ入るべき獨り我
れのみかひなく、誰れも此館にまで出て來ると云ふ
事にて。

美術館の後面に五彩燦爛たる支那風の塗壁を築
きなる豪華な屋根の尾根を冠せる建物のある、これ
を書院館とし、彫くに左右を連ねた門の右側
に緣の二枚開きたる扉に「彭城錦世澤」「瀛海藏
家珍」の、と云ふ支那流の聯句が彫つてある、左の
入口に入ると「萬芳書」の三字を題した扁額が掲げ

てある室がある、中にすゝんで支那人家族の石像數を
それぞれ支那の仕立を着せて陳列し、書齋に支那男女の人形
も並べてあるが、こゝには支那の親族の家族から
てなるもの、何處と金も歸家を擬しつけたると
支那支人の「纏足」のいろいろもなかなか皆珍しく見ると
れて●呆れてをつたのであるいはまた列品を掲つてゐ
るのが如何の様な丈をとゐる、此處には五彩燦爛
であるも主流であるが蓋し一二ヶ月も經て尚家
のさらさんたる像とんなるみすぼらしくなりひ
あるらしきも要るなる心配もした此館を出
れが美術館の左側丘下に蒲田茶室の

一森林の部、標札のうつてあるところ、何人もよく見て居るとは
此の家は御料局の出品で、家の結構を見るとみんな
ひのき、御料局山林の木材数十種を寄せ集めて
作つた家で、いまだ世界に無比のものといふことの由
材木の多く集つてあるところ、よく注意して見よ
と書いてある、第一等の賞牌をもらつた、思付がある、西洋
の諸国でも木材なんどよく見るが日本のそれの
よく研究してあるは面白いであらう
それの書りくの観覧場で一通り陳列をしてある
四隅にあつて、美術館を見にいつて見るに其處
其處にありところの明治四十年十二月を期して過ぎ

初年の度かと見え、恐も大分減つた様に思はれるの
で、建屋なども一つも三百余坪あつて、ついで此の様
観覧場の総体を積もれば確かに陳列館をも延べ
して、これを四町四方に造れる場にも、三百余坪の
前と後の此等の館、大いなる陳列館の向つたところにあつて九
分けた事業であらう、観覧者の論者の此等の内に二
億十万坪もあるが、陳列品総数も七万五十一種
であつたのは十分…十五種か数を増かしたもの
の観覧人の数は二百万人といふことで、五ヶ月の間に出かけ
かけたところ人々確かに達したであらう、まづかく
第四回の方であらう、其の欠点を余す所、第一会場

地の事なりと片寄りたるにはあらねど大阪市中に鉢
植の多き家々には是れもまた雑誌にあまたあれど不
便の由にて先づ其の所に此の樹木を植ゑ
ありと云ふ事なりしなれど、其の手入れの由にて噴
水の水のごとき、水道の水を〇分けたるもありと云へ
ば、市中の飲用水は時に鉄道を生ずる地の水道
びあるときは充分なることにかけられ其の水道
されど此の所の噴水も出来たる由なれば〇分に高
又市中の樹木のことも未だ夫れ程人家の繁
盛の所々には見えざれど五六月頃の熱気に際しては
どんなものであらう、各戸の屋根をトタン板に

炎天に熱し尽して煤煙の如きものを生ずる事あらん、大阪
人も先づ闇黒の中より地方へ帰るべき人多きを引き付け
得べき策を云はゞ上記のごとき樹林深く茂らしめ
高き地の樹の設備を為すべき事も必要の事である
のみ（三月十二日東京牛込寓所の燈下に於て
来阪の一人（しるす）

○木版彫刻と西洋風の印刷

團華となる美術部は繪出版するところも繪画複製をなし技術長足の進歩をなし美術界に貢献するところ鮮少ならず即ち其筆ならずや木版而して其の複製を以て日本固有の印刷法と云ふべきものありて版のごときも寧ろ繪を本国とてなりたるもの有 版木師の手にて彫刻せられ、西洋風の印刷術の勝く進みしや否や、日本風の印刷術の廣くなるの久しくの未曾有の進歩をなしたりとも一奇と謂ふべき一の事なり 但其本もの繪画彫刻の術と繪の版画繪者の無人に行はれたる時代に於て我國の進歩をなしたる其道ありと云ふべし 廿八日初出京にて 観音の図を描出しし

あらゆる原圖を以て模製するにあたりてよろしく隨って彫
刻したる精巧の域に達せざる書籍の詳かなる記録悉
くの彩色を擇ぶなく原著者も其複製せられたることの異
同を論せざらしむるに至る挿画の要の益々多く
しが圖案と並に技能あるの人に乏しく複製をなさん
目的としたる結果木版彫刻をして實にその巧緻を
極め從って書物も非常の進歩をなして我印刷史上特
筆大書すべきことと云ふべく其の印刷機械をも自ら
に進歩をなし精又精の域に進むと共に絵画模寫
のごときは利器機械の力によりなし得べからざる微
とし其の精細なる描寫する微精の論をあるを以

ここに略すべきが、既に前西洋風の印刷術の未
だ普及せざる以前即ち和風の印刷術の盛んなりし
時代を通じてよくみるところにして、後世の印刷術をも
くりては美術界に絵画複製し手ずから保存せ
くるべきことをここに特筆しおかんとす、國華
挿画の木版彫刻、前く書籍の詳細の如き其
の技術の者にして一たび之を見たりしもの必ず
心服せざりしもの、然るに今や紙上彫刻の
隆盛なる今日も全く活文画と詳細の法を揭げ
たるのみならず模写す

●繪畫と木版（一）

（文學士瀧精一氏の談）

『國華』の木版色摺といふ御注文だが、御存じの如く『國華』は其始め高橋、岡倉の兩氏が發起して、ソレに大阪の村山、上野の二氏が加はつて經營致しましてから既に十五年の久しきに亘つて、ともかくも出版界の名物として成立つ間には隨分苦心の事もあつたのでありますが、今日は其中で重もに木版色摺の事に就て御話をいたさうと思ひます、殊に本社の木版色摺の職工に至りましては始めから隨分名人があつたのであるが、是等の人の事蹟は動もすれば湮滅し易いのである、然るに今日之を御話する事の機會の出來たのは誠に幸であります。

一概に木版色摺といふと、人は或は皆一樣の物のやうに思ふのであらうが、實はさうではないので、其中にもいろ〳〵種類がある、併し先づ大別して言ふと一つは裝飾的の意味を以て精巧を盡さうと云ふ主義のものであり、モウ一つは只管原物の通りに正確に繪畫を複製しやうと云ふ主義のものであります、マア大略此二つに分れる事と思ひますが、世間で所謂木版色摺の精巧なるものは前者の方で即ち裝飾的に工夫したものが多いのであります、處が此の『國華』の木版色摺は寧ろ後者の方即ち原物の通り正確に複製する方であります、ツマリ『國華』は其の一つの事業として木版を此方の側に發達させるに就て非常な苦心もし又成功もしたのであります。

ソコで今『國華』の木版色摺を御話いたしまする前に極く大略に古來日本の木版色摺の沿革を述べて置く必要があらうと思ひます、日本の木版は極く古い所は暫く措きまして今日から調べて分つて居りますのは、丁度元和の比のことでありました、江戸で始めて浮世繪の摺物が出來まして當時之れを江戸繪とか或は一枚繪とか稱して墨摺丈ケのものを刊行しました、ソレから延寶天和の比に至りまして今度は丹繪（タンヱ）と稱して墨摺丈は版にしてソレへ丹であるとか或は其他の繪具を塗つたものが出來たのであります、併し是は墨摺丈け版でありまするが、其の彩色は筆で入れるのであつて未だ色摺といふものには成つて居りませぬ、後になりまして又た之れを紅繪（ベニヱ）ともいひました、即ち丹の代りに紅を使つて赤色を出したのであります、次に其時分に又墨摺の上に金泥を撒き散らしたり或は漆を塗つたりしたものがあつてソレを泥繪（ダイニ）とか或は漆繪とか申しました、兎も角も色摺術の胚胎したの

は此時分にあると申して宜しい、併し眞に色摺の出來たのは即ち明和年間に至り金六と云ふ彫刻師がありましてソレが始めて木版に所謂見當を付ける事を工夫して、さうして四遍若くは五遍位な重摺を始めてからの事である、是れは當時察暦大小の如きものゝ摺物に用ひられました、それから後に至つて彼の有名なる司馬江漢の師匠の鈴木春信と云ふ浮世繪師が盛に色摺を應用して自分が描いた繪を複製し始めまして、以來東錦繪なるものが殊更らに世の中に珍重せらるやうになつたのであります。

矢張前の木版色摺の沿革の續きですが此の春信に次ぎまして勝川春章といふ人も亦色摺の術を進歩させるに與つて力あつたのであります、ソレから北川歌麿、歌川豐國等に至つて段々精巧に赴き、國貞に至つて其極に達したといふて差支へない、即ち日本の木版色摺術なるものは天明寛政以來非常に精巧なるものとなつて進歩したのである、然るに是迄の色摺といふものは重もに所謂錦繪に用ひたのであつて、隨つて其應用の目的は極て卑近なものであるといはねばならぬ、ソーリ言つて見ると錦繪の色摺は或る程度迄は原物の版下に似なければならぬが、何處迄も原物に似させる必要はないのである、どちらかといふと原物には似ないでも成るべく見る者の眼を悦ばす爲の麗はしい物でなければならぬと云ふことになつたのである、夫故に從來我邦の木版色摺術は中頃即ち重信、春章あたりの時代には割合に原物の通りに寫し出す事を目的としたものもあつたが、其後になつては所謂精巧は寧ろ複製的の意味で精巧ではなくして、一種の裝飾的の意味に於て精巧といふ方になつたのであります、デ不思議な事には後世は版木屋なるものゝ工夫が却て原物の繪を描く筆者の意匠よりも大切になる傾きが生じ來て遂に繪師が木版工の命令に從つて繪を描く事になつたのである、ソレが即ち日本の近頃の浮世繪を衰微せしめた一つの原因になつたやうに思はれる、之を簡單に申すと我國明治の初め迄に木版色摺の術は段々進歩して來たに相違ないが、ソレは唯今申すところの裝飾的の意味に於て精巧を盡すといふ方に進歩したので、原物の繪畫を鑑賞する爲に之を正確に複製する方の側に至つては寧ろ益々退歩して來たと言はねばならぬ、ソコデ從來の此風潮に反對して正確なる複製を目的とする木版色摺に新らたなる進歩をなさしめたのは即ち此『國華』が出來てから以後であると信じ

まず『國華』は最初から總て日本の繪畫を複製するには西洋の彩色版では到底駄目である、日本畵はどふしても木版でなければならぬといふ考から工夫をして、遂に御覽の通りの挿圖を作るに至つたのであります。

然らば『國華』の木版色摺の方法はどうであるかと云ふことになつて來るが、ソレを御話しするにまづ木版を彫刻する方の側から始めるのが順序です、凡そ昔の木版では寫眞術がありませぬからして、勢ひ原物を畵工の手に因て縮寫してソレを版下といたしたものであります、夫ゆゑに全く正確に出來ぬのは當り前の話である、處が『國華』のはまづ原物を寫眞に取りまして其寫眞を土臺として更に畵工が着色の縮寫を拵えるものであります、併し此の畵工の揃へる縮寫は印刷の時に唯た色の手本になる丈けでありまして實際彫刻するには之を用ひないのである、乃ち彫刻する爲の版下は西洋紙へ燒つけた寫眞であつて、之を直ちに版木へ貼り付けて彫るのである、尤も西洋紙は厚いものでありますから裏から透通して見る事が困難である、然らばどうするかと言ふと、其厚い寫眞の紙を板へ貼つて置いてソレを上から段々擦りへかして行つて唯表の寫眞の膜丈けが殘る位にして初て彫りに掛ろのである、處が是は彫る方から言ふと非常に難義なものである、併しながら正確にやろうと云ふには目下是れより外に方法がないのである斯樣にしてまづ繪畫の土臺となるべき墨書き丈けを彫りまして此板を墨板と稱へます、それから先きは畵工が原物の着色を調べ分けて既に墨板で出來た墨刷の中へ段々と其色の順序を書き込んで行つて、さうして幾枚も版木を拵えるので是は即ち色板と名づける者であります、此色板が『國華』の挿畵などに於ては非常に數が多いので、普通の木版であると色板が二十回とか卅回とか云ふとソレは餘ほど精巧なものゝ中に這入ッて居りますけれども『國華』のは時としては百回近くも色板を使ふとがあります。

次に又彫刻の業に就て云ふと、容易の手練ではとても原物を縮めて而かも原物の通りに彫る事は出來ませぬ、一見してとても彫れ切れまいと思ふ位の細かな者でも其通りに彫らなければならぬのであつて、細かいと云ふ點に於ても既に隨分困難があるが、又同時に原畵の筆意を失はないことが甚だ大切な事になつて居る、のみならず此等の外に尚は又た最大の困難がある、凡そ從來の木版に於きましては所謂『カスレ』れ即繪の方でいふ渇筆の如きは殊に彫りにくいもの

(11)

ゝ中に數へられて居りましたが、是などは實は多く時間を費してさへ彫れば隨分精巧なものが出來ないことはないのであります、處が『國華』の挿畵に於ては唯々細かく筆意を失はずに彫つたばかりでは未だ不充分である、其上に又成べく刀を深く入れて彫る事が必要なのです、是れが第二の困難の點である、凡そ木版は唯だ一遍の墨刷丈で濟むものならば刀が淺くても宜いのでありますが、其が色摺であつて殊に粉繪具を用ゐて摺つたり或は岩繪具を用ゐて刷つたりするものになると、刀が淺いと直ぐに埋まつて役に立たゝぬ事となる、又保存の上から言つても刀の淺いのは忽ち磨滅することは勿論であります。

然るに此等の要求に應じ得る丈の技倆を持つて居る職工は世の中に決して多くあるものではないのですが、幸ひにも『國華』が初めて出來ました時分には世にも稀なる彫刻の名工があつたのであります、今から少しく是等名工の事に付てお話しいたします。

當時彫刻に於ける名工の一人は今の木村徳太郎の門人でありまして又同人の女婿であつた三井長壽と云ふ人であります、是は『國華』の繪を彫刻いたします前に既に耕香館書牘或は花鳥畵譜等の繪を彫りまして其の技倆が卓絶して居つた事は私共も早くから知つておりましたが、遂に『國華』の挿圖を彫る事になつて益々技倆を高めました『國華』の目的とする木版術が容易に成功を得たと云ふのも實は此三井と云ふ人が居つたお蔭でありませう、此人の技倆の卓絶して居る事は其當時でも又今日でも同業者間には隨分知られてあつて或は昔から木版彫刻社會には是程の名人はなかつたらうといふ者もありますで此人が彫つた物は『國華』に澤山出て居りますが其中でも第卅九號の一字金輪と先般農商務省で作つた日本美術略史の挿圖になつております地藏菩薩、是れは自分でも得意として居つた作であります、此の人は技術も優れて居つたが兎に角熱心であつた事には實に驚かざるを得ないまづ毎日社へ出勤するに此人丈は何時でも極た時間より數時間早く來る、未明に社へやつて來て社の門がまだ締つて居るとまづ近邊を一週り運動して來てさうして門の開くのを待つてすぐ仕事にかゝると云ふやうな事があつた、餘り勉强が過ぎるからといふので或時他人が忠告をした事がありましたが、其の時に自分で言ふには自分は何にか一つ丹誠をこめて彫つて見やうと思ふと、どふも夜も碌に寢られないそれで據な

來ます、是が出ると其摺物は所謂「ヤレ」になつて仕舞つて役に立たぬのであります、尤是がなくとも所謂「廢レ」は隨分澤山出るもので先づ千枚摺る中に百枚位出ることは往々である、色摺は先づ斯樣な次第のものでありまして昔のやり方とは全く趣を異にして居ります、併し摺の方で『國華』が成功するに至つたに付ても矢張り彫刻の方と同樣に始から上手な職工が關係して居りましたから都合が好かつたのであります。

『國華』の印刷を最初から一手でやつて居る摺師は田村鐵之助といふ人であります、是は元と濱鐵と申しまして、先代から精巧な刷物を拵える家でありましたが、鐵之助は殊に上手であつて、是も三井飯山の居る時代に非常な熱心を以て仕事を致しました爲に、例の一字金輪とソレから第三十七號の祐信の觀菊の圖と此の二つを摺つた揚句に眼病になつて暫らく惱みましたが併し幸にソレは一時の病であつたと見えて、今日では多くの門人を率ゐて一家を成して『國華』の仕事の傍眞美大觀や其他の物を引受てやつて居ります、さうして其門人の和田藤吉といふ者もナカナカ上手であります、其外に又古くから『國華』の仕事をやつて居る者の中で近藤市五郎、椎名和吉、鳥居榮吉なぞ何れも錚々たるものでも長年月の中に段々養成して行く方針を抱て居ります。

あります、兎に角本社では摺師にしても又彫刻師にしても其一人が欠けたからと云ふてもチヨツトの間に補充することは出來ない、偶々他から雇つて來ると大抵は一日か二日で閉口して歸つて仕舞ひます、夫故に本社では彫刻師も摺師

三井飯山が亡くなりましてから唯今では其の時分助手をして居りました江川金二郎と泉信吉とが主任になつてやつて居りますが、此兩人も非常に熱心家で殊に近來著しく技術が進歩いたしました、此度大阪博覽會へ本社から出品しました額面は、一つは醍醐寺の虚空藏菩薩の畵を複製し、一つは大雅堂の山水の卷物を複製して、何れも此江川、泉の兩人が彫りましたもので、其技術の如何に優秀であるかは其實物に付て御覽を願ひます。

ソレから次ぎに摺り即ち印刷の事に付て述べますが、是れもなかなか込み入つたものである、先づ此『國華』の挿圖の印刷は百遍二百遍、乃至三百遍位重ね摺りをいたす事は珍しくないのであります、ソレはどふしてさやうに澤山重摺をするかと云ふに、其筈である、例へば一種の繪具を以て摺るものでもソレに濃淡が附て居るとか或るは暈取（クマドリ）がある場合には、一面の版木を幾度か摺らなければならぬ、一面の版木を一度づゝ

摺つて濟むといふ譯にいかぬ、版木が百面あればどうしても摺の方は三百遍位になるのであるソレで是れから版木が出來て愈〻摺りに掛る迄の成行からお話をしますが、先づ最初版木が出來上ると摺師が版木に『見當』を付ける、此『見當』と云ふものは唯だ二ヶ所だけのものである、唯だ二ヶ所丈のものであつてソレでもつて總ての版木が重つて行つて少しも出入がなくキチンと合せて摺ることが出來るのである處が此版木には往々にして狂ひが出る事がある是れは餘程困る事である、何しろ版が木で出來てゐるから幾ら乾かした好い木を使つても全く狂はないと云ふ事は出來ない、然るに其版木が狂つた時にはどうして之を直すかと云ふと、ソレを修正するには外に方法はないので、即ち版木の一面に水を引いて伸縮させて修正するのである、斯樣な極めて簡單なる方法でやるのであるが併し其の修正は存外要領を得たものである時としては彫り直さなければならぬやうなことも起るけれども、夫れは割合に少ないのです。是の如く木版印刷の準備は大方手加減丈ケでやるので極めて迂遠な事のやうである、毎日摺師の刷つて居る所を見て居ても矢張り其の感がある、所が其の出來上つたものを見ると此の迂遠

な方法が意外に確なものを作らしめるのは餘程不思議であります、是れが若し人間の手加減でやるのでなくして器械でチャンと極まつた仕掛で刷るとなつたらどうであるかと云ふに、夫は斯う正確には出來ないに相違ない、其は益〻不思議であろう、然るに現に西洋の彩色版を見ますると、アレは一々器械で重ねて色を刷つて行くのでありますが、其の重刷りはチャンと出入なく版が合ひさうなもので合はない、ソコで西洋で刷つたものを見ると始めから少し宛すつて居る、即ち色の重なつて居る所の緣の方は何時でもハッキリとしないで幾分かボンヤリとして居る即ち版は初めからキチンと合はないのを覺悟してやつて居る。

さて何故に器械でやるものが却つて正確に合はぬかといふと、ソレには理由がある、何となれば之を刷る器械の方は全く正確ではあるけれども刷られる紙の方は全く一やうのものとはいかぬ幾度か重ねて刷つて居る間に紙が伸びるのは自然である。處が器械は正確である代りに少しでも其紙の伸縮に對して加減をすることが出來ないから、却て其合はない所が現はれ易いと云ふ結果になる、ソレであるから西洋の器械で刷る色

く夜の明けない中から早く來て仕事をするのであると答へたことがあつた。

又此の三井長壽に就きましては逸話も色々ありますが、其一二と云ふと、元來此の彫刻の監督には畫工が必要と云ふ事になつて居て、彫刻師は一々畫工に相談するのが當然である、然る所が此三井の如きは畫工に相談をすると云ふよりも寧ろ畫工以上の見識を持つて事に從つて居ることは屢〻ある、それが爲め凡庸の畫工が縮寫をしたものなどを彫らせると決して滿足して彫らない、加之ならず却て逆に畫家をやッつける樣な事があつたのであります、それでどんな困難な物で當り前ならば幾分か筆を以て補はねばならぬ位のものでも此人は寫眞と原物の外には何も標準を取らない方針でやつて居りましたソレから三井と丁度同じ時分に飯山良助と云ふ彫刻師が居りました、是れもなか〳〵名人である、此人を社に雇ひ入れたに付ては三井が紹介したのであるが、其紹介した事に付て面白い話がある、三井は平生から自分よりモット腕の優れたものを目附てソレを社に入れて貰つて一緒に研究して見たいと云ふ事を社員に語つて居つた、處が或る時故あつて社の手丈けでは彫刻が間に合はなかつた事があつて、據ろなく社外の

者に彫刻を請負はせて一版彫らせた事があつたソレは丁度第四部に出て居る三聖の圖です、さて其版が出來て見ると釋迦の螺髮の毛書きが如何にもよく出來て居つて少しも原物の筆意を失つて居らぬので、三井は之を見て驚いて、斯る名人が東京に居るとは少しも知らなかつた早速入社さして呉れろと云ふ、ソレから社の方でも其名を調べるとそれは江川千太郎と云ふ者の弟子で當時江川の良助と言つて、其社會では多少人に知られて居つた男で即ち飯山良助なるものであつた、ソコで之を入社させてから兩人は益〻競爭して殆んど互に優劣なく仕事をしたのであります、此飯山の彫つたもので殊に得意としたのは、第八十七の江口の君、ソレから例の美術史の中にある博物館の普賢菩薩などでありま す、處が此兩人は餘りの苦心と勉強との爲めか孰れも早死をしました、三井は明治二十八年三十四歲で亡くなり、飯山は明治三十年四十一歲で亡くなりました、誠に惜しい事をいたしましたが、實際此兩人の如きは自分の技術の爲めに討死したものといふてもよろしいのであります是等の人は職工と言つても尋常一樣の職工ではない、社が此等の人を抱えるには初めから世間の彫刻師の賃金の數倍を給して居つたのである

が、併し是等の人は決して賃金の爲めに働く人ではない、技術の爲めに一切他の事を顧みないで一意專心其腕を磨くことに力めたのは實に感心の事であります、此兩人の力は所謂『國華』の木版を成功せしめたのみならず、弘く世間に於ける我邦固有の美術的彫刻術に對して非常な影響を與へて居らうと我々は考へるのであります併し悲しい事に世人は是等の人を矢張り職工と目するのであるから遂に世に顕せられずして死にました、世間では美術家とでも云ふ肩書を持つて居るとなると、隨分下手でも案外人に持囃されて居りまする、然に木版彫刻師など〻云ふと職工だからと云ふので之を顧みる人が誠に少ないのである、ソコで私共はどうかして是等の人の名譽を博へてやりたいといふ考を持つて居る折から、丁度御社で『國華』の事を話せといふ御頼みでありましたから、私は一つは彼等の追善の爲めと思ふて是等の人の技術の卓絶して居つた事を申すのであります

次には顔料のことでありますが、從來木版に用ひ居る顔料は大抵[illegible]のあつたもので重もに水繪具ばかり用ひて[illegible]粉や岩繪具の如きは殆ど用ひて居りませぬ、偶ゝ之を用ひる事はあつても夫は所謂「ベタ物」と稱して一面に塗つて仕舞ふ時に限たものです、下に既に繪具が塗つてあつて其上に更に糊粉若くは岩繪具で書き込む所などは昔の木版では之を其の儘に寫し出すことは出來ませなむだ、所が『國華』の色摺では繪師が用ふると殆ど同じ數の繪具を用ひます、尤も此糊粉や岩繪具などを用ひる事の出來るに至たのは一つは彫刻の方法にも關係があります、夫は前に申しました通り刀の淺い彫方で細かい物を彫つたのでは迚も岩繪具などを使ふとは出來ませむ、深彫であつて初めて是等のものを用ふることが出來るのです。

斯樣に此『國華』の色摺と云ふものは非常に込入つたものでありまするが、唯今申した事の外に尚ほ樣々な困難が起ります、其一例を擧げて言ふと、印刷のなかばに紙の腐敗する事などは大に困る、ソレハドウ云ふものかと云ふと、元來色摺を致しますには始に紙を濕ほして置いてさうして之を以て摺るのであります、此の紙の濕ひがないと紙が堅くて平らに旨く刷ることは出來ない、然るに濕つて居るものを以て長く重摺をして居る中には其紙が腐て來て内部に斑點のやうな黴が出て來る、是は暑中などは殊に早く

刷は日本畫の樣にはつきりと線の區畫のある繪を複製してもとても面白くは往きませぬ、日本畫の複製は矢張り木版摺でなければならぬといふ事は殆んど天命として極まつて居る樣に考へられます、ソレから又器械で刷る版が日本畫に適當しない事は此外にも種々の理由がある、例へば器械版であるとどうしても油の這入つたインキで刷らなければならぬと云ふことになるが日本の繪ではどふしても油の這入たインキでは其色が出ないのです。

ソコで『國華』の色摺の方法が從前の方法と異つて居る點は何處にあるかといふと、先づ昔は一つの繪を印刷する場合に其原物を見て色調をして色板の版下を作るのは重もに摺師がやつたものださうです、處が摺師であると原物の本來の著色の味は充分に判る筈がないから、自然自分の勝手に色を省略したり、又は實際原物とは違て居るけれども外見上似寄た色などを用ひて手間を省くといふ弊がある、現に『國華』以前の日本の色摺が裝飾的には發達したけれども複製として益ゝ進歩したと云ふに付ては、摺師が畫工を待たずして自分で色調をした故にも起因する事とおもいます、夫故に本社では始めから特に畫工を置いて色別けをやらせ又畫工が嚴重に摺師の監督をします、其畫工も尋常一樣の畫工ではいかぬので、古い繪を博く覽て各流各派の手法を呑み込んで居る人でなければならぬ、デ本社では美術學校第一回の卒業生の村山旬五といふ人が主人でやつて居ります、此人は最早十餘年間本社で此事に從事して居るのですから木版の事に付ても非常に精通して居ります。

次ぎに摺師が摺りをするに付ては刷毛の使ひ方から「バレン」の用ひ方は一種調子のあるもので是は矢張り畫工が繪をがくやうなものであつて全く天禀と熟練とかなければ甘くは摺れません又木版の摺で最も六ケしいのは所謂「ボカシ」です、抑ゝ此「ボカシ」を附るに付ては大別して二種の方法がある、一つは「板ボカシ」と言ひ一つは「フキボカシ」と云ふ、板ボカシは其版木に既に斜面が出來て居つて是は一遍の摺でボカされるのであります、所が「拭ボカシ」は版木は平面に出來て居つてソレに刷毛で繪具を塗つてさうして之れを拭巾で拭ひて摺るのである、「板ボカシ」と云ふ方はチョッと考へると甘く行きさうであるが、是は實は極めて應用の狹いものである、ソレで此木板色摺に於て本當の「ボカシ」を附けやうといふにはどうしても「拭ボカシ」の方でやらねばならぬ、印刷の益ゝ込入つて來るの

圖覧室

は全く此爲めである、重摺の度數が澤山になつて來るのもツマリ「拭ボカシ」を澤山やらねばならぬからである、例を引て云ふと茲に一つの繪の中で互に接近して居る個所で幾つも「ボカ」さければならぬと云ふ場合があるとすると、ソレは一つの「ボカシ」毎に版木を別にしなければならぬと云ふ事になる、即ち花の暈取などは其適例である、是は一つの瓣のボカシと其次にある瓣のボカシとは接近して居つて別々にボカスのであるから、幾回となく版木を使はねばならぬソレから又原物の繪では一筆で一度に出した色でも版では薄い色又は異つた色を何度にも重ねて刷て始めて原本の如くになる事がある、夫故に世間普通の色摺は隨分繪師の筆を籍りて補ひをすると云ふことがあるのです、けれどもソレは固より完全な色摺ではない、筆で一度に補つたものは時として原物の如くに出來るが何時でもさうは往かぬ、假令迂遠なやうでも木版は幾度も重ねて摺る中に筆で眞似られない正確なものを作り得るのである。

さて『國華』の木版色摺なるものは大略右述べましたやうな工合のもので今日では兎も角も一段の成功を遂げました、併し將來はどうであるかといふと、マダ澤山改良を圖るべき事があると考へます、其技術上に關係した細かいことは暫く措きまして、一例を申しますると、今日までの所では濃厚な著色畵即ち佛畵とか乃至は一般大和繪風のものに於ては殆ど遺憾なく正確なる複製をなし得ますが、彩色のアッサリとした淡彩の畵に至ると却て困難な事がある、例へば南宗派の山水とか光琳派の花卉とかいふものになりますとどうも調子が面白く往かぬ事が多いのです、此方はもう一層工夫を重ねて進歩させて見たいといふことは我々も常に考て居るのであります、併し昨年發行しました第百四十二號の光琳の躑躅花圖、是れは淡彩ながらに割合に成功した積りでありますが殊にあの圖の中に下に水の流れがありますが、其水の流れの線は尋常のボカシ摺では充分にいかぬと思ふので、ソレを彫刻の方で一種のニジミを彫るやうな工合に彫て、更に又ソレをボカシたのですが、是は一工夫であつた積りです、ソレから又山水畵の淡彩なるものは今度博覽會に出品した大雅堂の横卷です、是は今までになく色の調子が正確に出來たものと信じます。

木版色摺の話は先づ此位にして置きまして、序に挿畵の材料となるべき美術品を蒐集する上の事を少し御話いたします、此材料は美術及工藝美術に關係する類の名作ならば成るべく博く集める方針であります、併し其中でも繪畵が、比較的多數を占めることは勢免かれませぬ、夫から又之を集めるに就ては、第一に採るものは勿論審美上價値のあるものでありますが、假令審美的には左程價値のないものでも美術史上の見解から見て必要なるものは時として之を收めるやうにいたして居ります、而し愈々之を集める段になると、我等一私人の力でやるのは隨分困難な事があります、美術品を持つて居る人の中には或は茶人氣質など、云ふのがあつて、如何に學術の爲め研究の爲めであるからと說ても遂に其の珍藏を秘して應じて呉れないのがあります、併し近頃は大分その方は減りました。……要するに今日の世の中は古い美術品の保存といふことに付ては政府でも民間でも大分氣が附いて來て夫々方法を講じで居るのは至極結構の事であります、併し古美術の保存は有形の保存丈けに絡つて仕舞つたならばそれは詰らない事と思ひます、既に有形の保存が出來る以上は成るべく適當なる方法を以て博く之を世間に觀せて專門の研究若しくは一般國民敎育の爲に資せねばならぬ事と考へます

『國華』は始めから今日まで殆んど九百點程の美術品を世間に紹介しましたが又是から集めやうと思ふものは澤山あります、夫に從來は地方へ出張して寫眞を撮る事を餘りやりませむでしたが、昨年からは一年に二回づゝ地方に行く事にしまして昨年は畿內で三百點程寫しました今年は又秋になつて參る積りです、かく段々と美術品をも集めて又其一々に就て研究をもして行くものでありますから、將來は完全なる日本の美術史を編纂しやうと云ふのが即ち本社の目的となるのであります、尙は終に臨で一言し置きますのは、此の『國華』を起したのは始めから全く營利の爲でやつたのでなく、十五年の間、何時も經費は足らず損ばかりして居るにも拘らず一貫して其體面を保て居ると云ふ事は今日の我邦の美術界に於ける美事として記識して差支ないと思ふ事であります、然るに世間では美術界の人でありながら或は是を商賣として利益ある仕事の如く思ふて居る者もあるやうですから、夫等の爲にかく辯じ置きます。（終）

明治三十六年
三月七日起筆
[illegible]学人